境界のキヌア

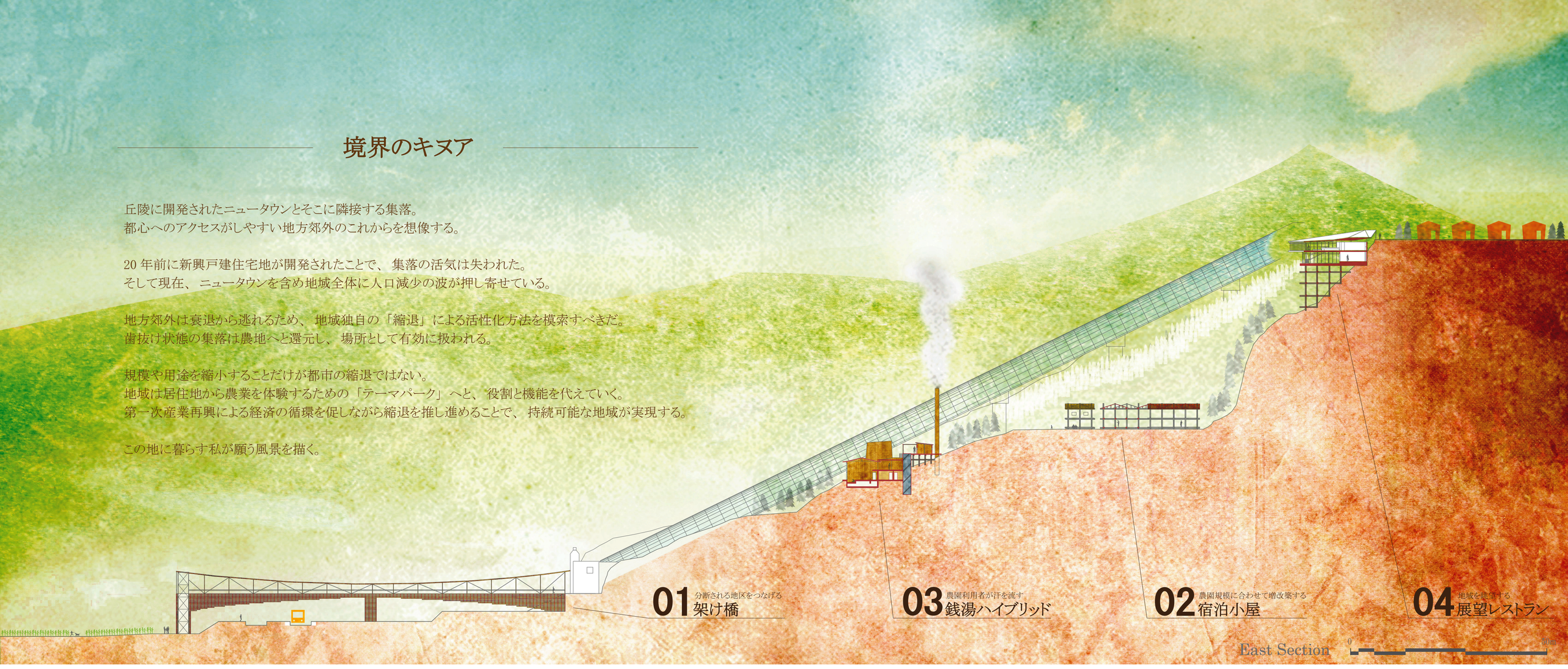
丘陵に開発されたニュータウンとそこに隣接する集落。
都心へのアクセスがしやすい地方郊外のこれからを想像する。

20 年前に新興戸建住宅地が開発されたことで、集落の活気は失われた。
そして現在、ニュータウンを含め地域全体に人口減少の波が押し寄せている。

地方郊外は衰退から逃れるため、地域独自の「縮退」による活性化方法を模索すべきだ。
歯抜け状態の集落は農地へと還元し、場所として有効に扱われる。

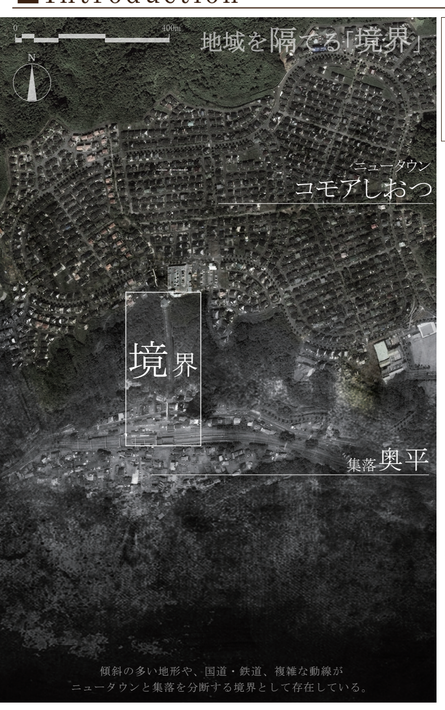
規模や用途を縮小することだけが都市の縮退ではない。
地域は居住地から農業を体験するための「テーマパーク」へと、役割と機能を代えていく。
第一次産業再興による経済の循環を促しながら縮退を推し進めることで、持続可能な地域が実現する。

この地に暮らす私が願う風景を描く。



■Introduction

人は集落からニュータウンへ、ニュータウンから都心へ移り住む。



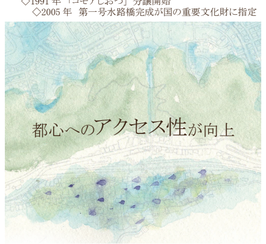
地域の軌跡

山梨県上野原市四方津駅周辺。20年前に駅北部の丘陵が造成されニュータウンが誕生した。これにより駅南部の集落は過疎化や高齢化が進み、遊休地の増加といった問題がみられる。さらに鉄道や国道、複雑な動線、高低差のある地形が「境界」として、人々の生活を不便なものとしている。

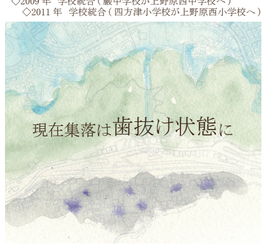
Ⅰ. 1890 年代
◇1896 年　中央線敷設工事開始
◇1898 年　上野原町誕生

Ⅱ. 1910 年代
◇1910 年　四方津駅開業・大野ダム工事着手
◇1912 年　八ツ沢発電所施設 第一号水路橋完成
◇1914 年　大野貯水池完成

Ⅲ. 1990 年代
◇1991 年「コモアしおつ」分譲開始
◇2005 年　第一号水路橋完成が国の重要文化財に指定

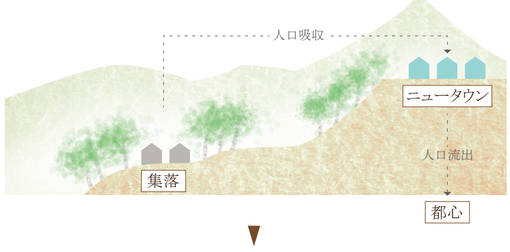


Ⅳ. 2010 年代
◇2009 年　学校統合（巌中学校が上野原西中学校へ）
◇2011 年　学校統合（四方津小学校が上野原西小学校へ）

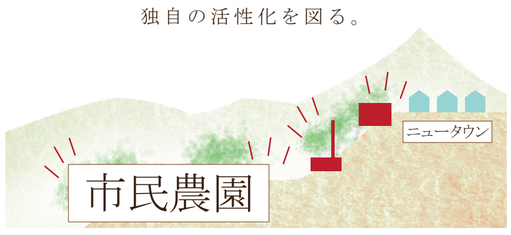


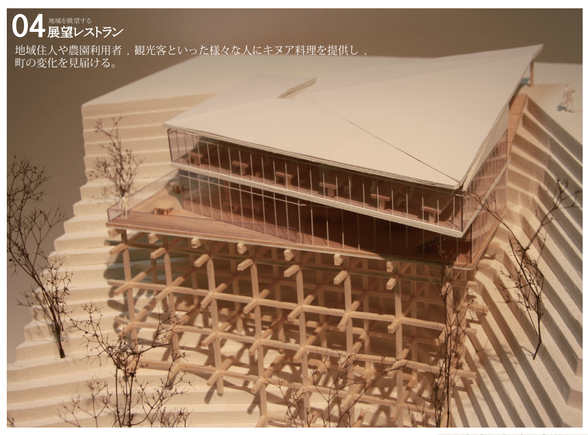
■Proposal

住民を分断する地形と
山々に囲まれた**閑散とした風景**



週末農業に関する人々が集まる空間を**分散配置**する。
時を経て地域の機能が単なる「居住」から
農業を楽しむ「**テーマパーク**」となる。
計画する木組みの建築はランドマークであり、
地域の機能を置き換える「縮退」により
独自の活性化を図る。





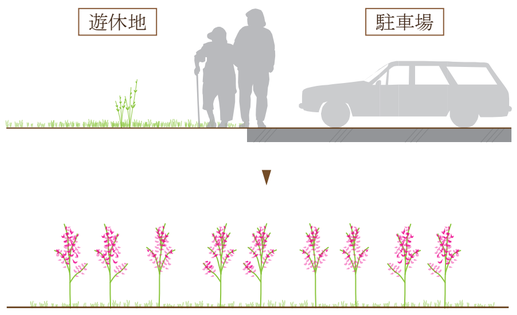
■Urban System

衰退する土地と建築部材を地域資源と捉える。

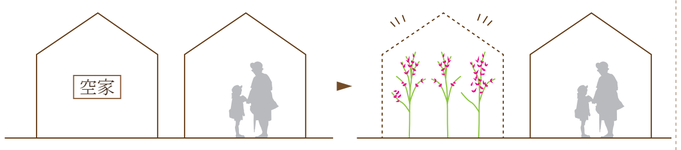
□SOFT – 農地化する集落

集落は衰退を受け入れ**市民農園を目指す**。時を経て人口が減少したニュータウンも農園となっていく。栽培する作物は、現在市の農業法人が研究栽培を行っている南米の穀物「**キヌア**」。地域は縮退するために居住地から体験農地としての機能を担っていく。

持て余す土地を耕し 市の取り組みである**キヌア栽培**のために提供する。

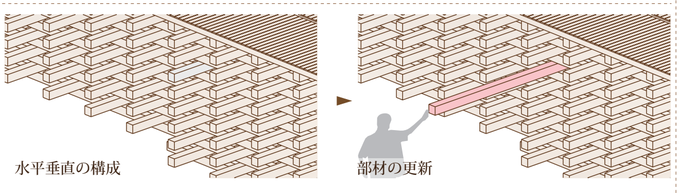


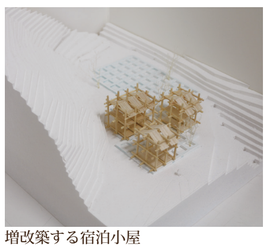
空家の発生にあわせ **農園としての土地利用を広げていく。**

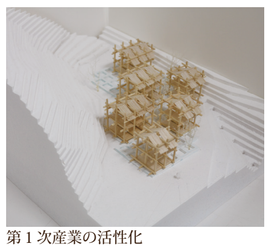


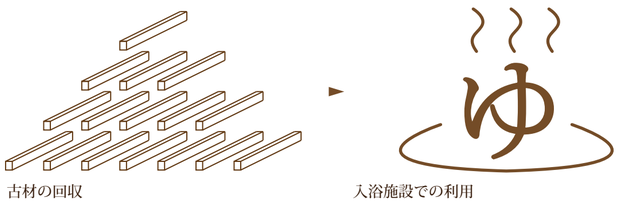
□HARD – 地域を循環する資源としての建築部材

市民農園のための機能を**木組みによるファサード**で構成し**分散配置**することで、動的・視覚的な流れを境界につくり、地域を分断している要因を解消する。これらの建築の部材は順次更新され、地域を循環することで、第一次産業と経済の活性化を図る。




増改築する宿泊小屋


第 1 次産業の活性化

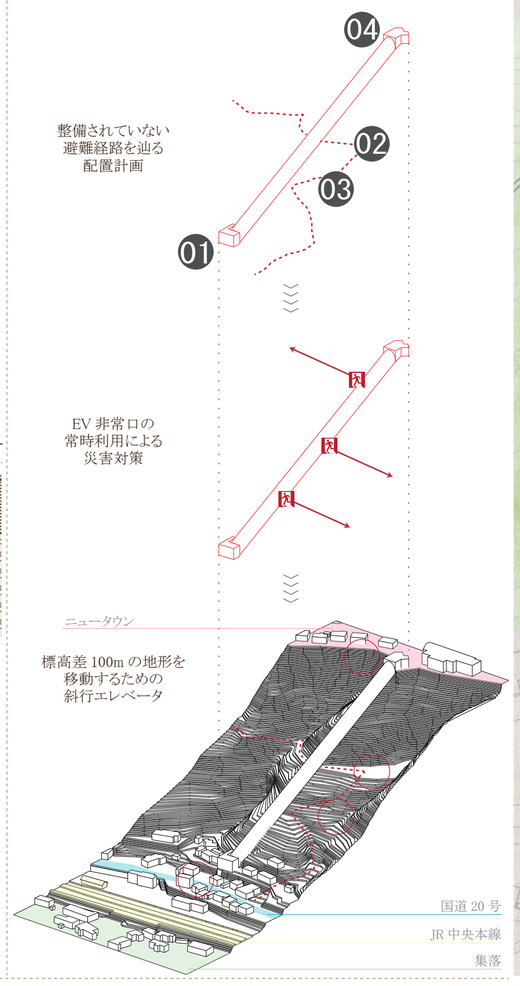
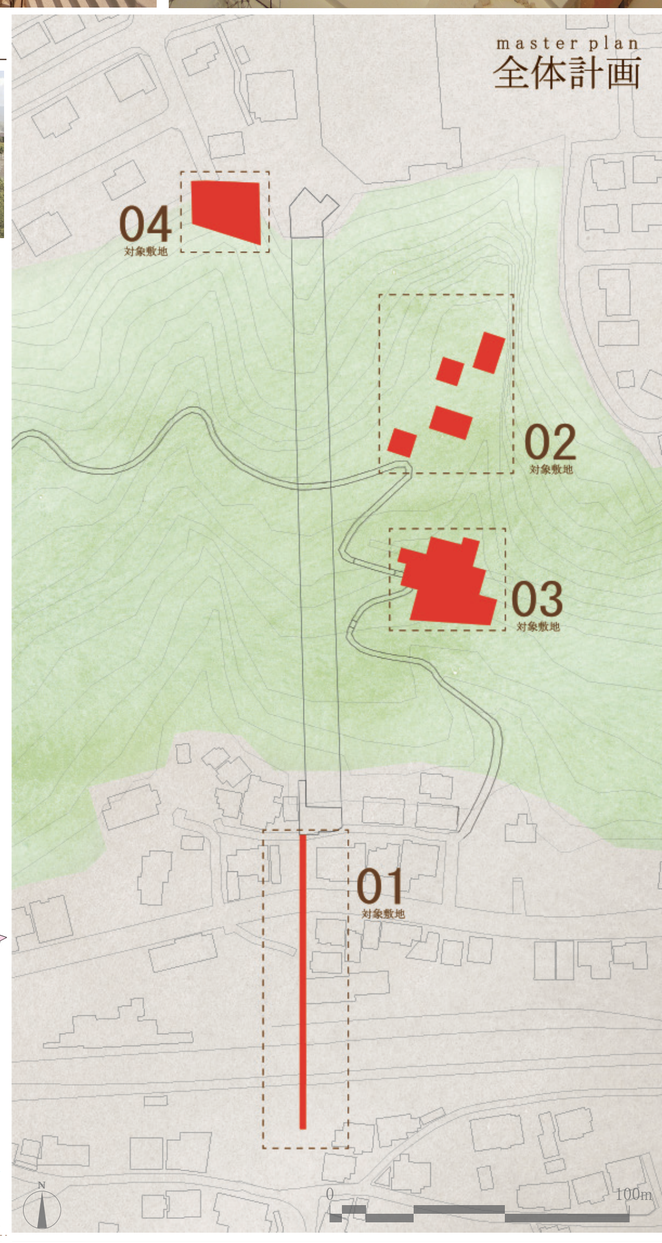
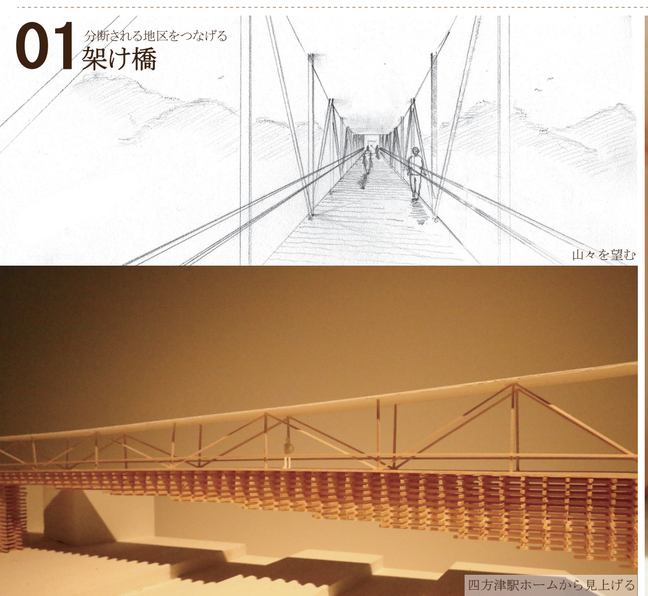
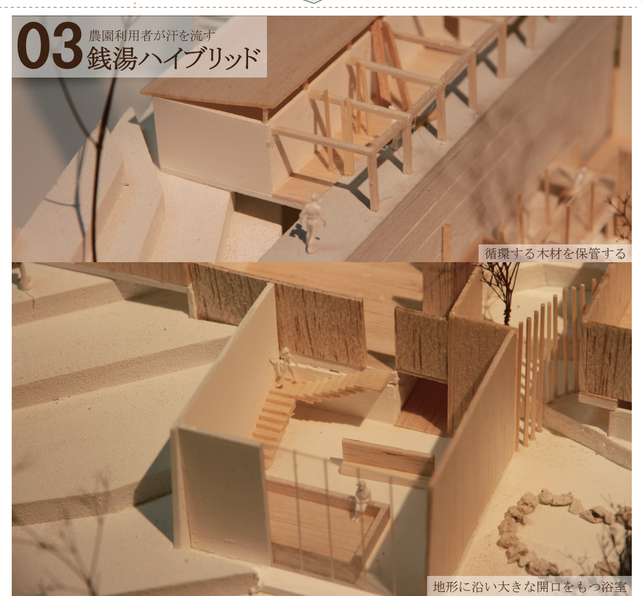
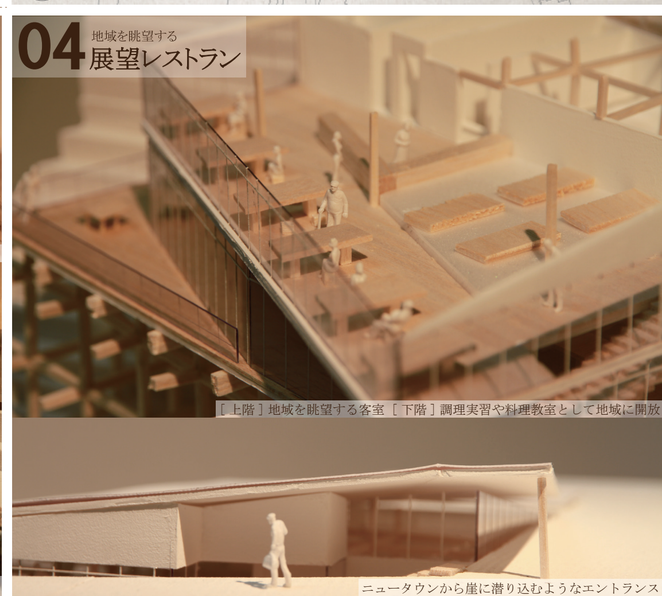


各建築モデルの**部材を地域資源と捉える**。回収される部材は煙を起こす役割をもち、循環する木材動線の終着点（銭湯）に集まる。

古材が銭湯や宿泊小屋で**薪として利用**され煙が空へ昇ることで、閑散としたニュータウンと集落との境界に人の気配を**顕在化**させる。

■Diagram

地形を辿る。

高低差 100m の地形を移動するための**斜行エレベータ**が既存する．
この周辺にある荒れた避難経路を整備しながら各プログラムの主動線とし、交流拠点の場とする．

ニュータウンと駅前を繋ぐ斜行エレベータ